

「ママ、先生が毎日一言でもいいから、親に何か書いてもらって来るようにだっ。」「
中学に入学早々、娘がそう言っで太字で大きく「連絡帳」と書かれたノートを差し出した。

「エーッ!!何て書けばいいの?!」
パソコンや携帯でメールを送り合うこの時代、まさか連絡帳を書かされるとは思っでもみなかった。――とは言え、白紙で出すわけにもいかず、取敢えずぐ当り障りの無い言葉

葉を綴って娘に持たせた。忙しい担任のこと、サッと目を通しただけで、確認の印一つで返されるものと思っでいた。

ところが、娘の持ち返ったノートには、個性的な力強い字で、「ご自身のこと、その目の娘の様子などがギツ、シリと書かれていた。授業の合間を縫って、保護者一人一人に丁寧に返事を書いて下さっている先生のお姿を想像し、頭が下がった。

よく、「今の教師は...」と批判めいた言

葉を口にしてしまうことがあるが、そんな自分を深く反省——。これからは、私も先生の熱心に負けずに返事を書こうと心に誓った。そして、あれから三年。連絡帳は、五冊目に入った。内容も、娘のことだけではなく、時には家族のこと、また、日常の取留めの無い話など多岐に渡り、もはや連絡帳というより交換日記的存在になっている。

時折、昔のページを捲ってみる。すると、その時の状態や気分（感情）によって、字体がかなり違っている事に気が付く。特に、風邪をひいて寝床の中で書いたと思われる文字の乱れは酷いもので、本人さえ解読不可能。正に、先生ゴメンナさいである。しかし、それも年書きの良さか——それはそれで、当時の様子が窺えて、懐かしく、楽しい。この連絡帳との付き合いも、娘の卒業とともに終わりを告げるが、連絡帳のお陰で、娘と同じ、否、それ以上に濃くて深い三年間を過ごすことができた。感謝の一言である。